2012年 8/31(金) 神戸新聞

福島原発事故考える

中央区 セミナーに100人参加

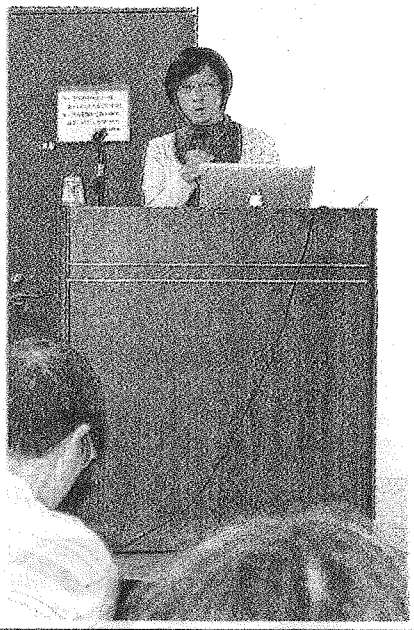
東日本大震災の原発事故をテーマにしたセミナー「福島の放射能汚染と被ばくを考える」が30日、中央区坂口通2の県福祉センターであった。被災地で活動を続ける兵庫医科大学非常勤講師の振津(ふりつ)かつみ医師=西宮市=が壇上に立ち、約100人が耳を傾けた。

ろっこう医療生活協同組合(灘区)の主催。振津さんは旧ソ連のチェルノブイリ原発事故の被災者支援を20年以上続け、その経験も踏まえ、福島県で健康相談や調査などにあたっている。

振津さんは「昨年夏の段階で放射能量は広島の原爆の168発分に相当する」などと説明。「健康の観点からは、長期的には特に子どもにリスクが高い」とした上で「健康上問題ないとの見解を繰り返していた政府や専門家には大きな責任がある」と厳しく指摘した。

また、「事故直後、何も知らずに子どもを外に出してしまっていた」と今も悩む母親の話など、さまざまな形で影響を残している事例を紹介。「福島は遠くの問題ではなく、私たちが生きている間には解決しないほどの事故。自分たちの世代の責任として考えるべき」と話した。

(安福直剛)



福島の原発事故について講演する振津かつみ医師=県福祉センター